

プチ紳士からの手紙
100号記念特別号

あなたからの

こころ

こころの
手紙

に
み
る

い
い
話
集



巻頭スペシャル企画

カレーハウスCoCo壱番屋 創業者
宗次徳二氏インタビュー

GUEST WRITER

高野 登	… 10-11
榎原 吉男	… 12-13
中井 俊巳	… 14-15
中野 敏治	… 16-17
比田井 和孝	… 18-19
木下 晴弘	… 20-21
村瀬 登志夫	… 22-23
池田 真実	… 24-27
木南 一志	… 28-29
西村 徹	… 30-31
鈴木 中人	… 32-33
小栗 健吾	… 34-35
八木 信人	… 36-37
七田 厚	… 38-39
辻中 公	… 40-41
水谷 もりひと	… 42-43
柴原 薫	… 44-45
志賀内 泰弘	… 46-47
窪 丈雄	…100の言葉

「運転手さんのお話」

ふたつ

高野 登

バスやタクシーの運転手さんは、ほんとうに大変だなあと思います。来る日も来る日も、乗客を安全に確実に、かつ時間通りに目的地まで届けなくちゃならない。仕事で起きることは嬉しい事ばかりではありません。自分の体調が少し悪い日もあるでしょう。それでも毎日、お客さんの人生を支えながら、仕事に真面目から向き合っているんですね。そんな運転手さんのお話をしようと思います。

最初はバスの運転手さんのお話。

札幌に日進堂印刷株式会社という会社があります。この会社は、法政大学の坂本光司教授のベストセラー、『ちっちゃいけど、世界一誇りにしたい会社』にも紹介されています。社長の阿部晋也さんから、二十四歳の男性社員の経験談を教えてくださいました。

その社員がまだ学生だった頃、通学のため路線バスに乗り、いつものように終点で降りようと思つたところ、財布を忘れた事に気付いたそうです。「あつ、まずい、どうしよう?」焦る気持ちをおさえ、彼は正直にお詫びしようと決めました。降りる人の迷惑にならないよう最後尾にまわり、運転手さんに正直に、財布を忘れてしまい、お金が無い事をお詫びしたそうです。「わかりました。では料金は今度で良いですよ」「ごめんなさい。次回必ず



今日の分もお支払いします! 申し訳ありませんでした」と深々と頭を下げ、バスから降りようとしたその時、運転手さんから止められたのです。「ちよつと待

ちなさい! 君、バス代はいいけど、今日一日どうするんだい? お金が無いと困るでしょ? これを持っていきなさい」そういうと、自分の財布から千円札を二枚取り出し、彼に差し出したのです。「それは受け取れません!」、丁重にお断りする彼。「いいから遠慮せず持つて行きなさい」と運転手さん。名前や住所を聞く訳でもありませんでした。最初から貸すのではなく、あげる心積もりだったのですね。

後日、彼は菓子折りを持ってお礼に行つたようですが、その運転手さんは仕事でお会いできなかったとの事です。会社の人もそんなことがあつたのは誰も知りませんでした。何事もなかったかのようになり、淡々と日々の仕事に向き合っている運転手さんだから、彼の真摯な態度に感じ入るものがあったのかも知れません。そんな素敵な経験をした彼もまた運転手さんの気持ちを一生忘れることはな

いでしよう。

次はタクシーの運転手さんのお話です。

長野市に中央タクシーという会社があります。顧客満足度、社員満足度は、群を抜いています。もちろん最初からそういう会社だったわけではなく、現会長が長年かけて、いまの社風を作り上げてきたのです。中央タクシーの運転手さんの使命は「お客様の人生に命がけて寄り添うこと」。数年前のこと、宇都宮会長がまだ社長だった頃のこと。社員から「社長、お電話です。何でも直接社長と話したいと言っていますが…」直感的に「苦情の電話だな」と思ったそうです。ホテルでもそうですが、上の者を出せというときは苦情に関するものが多いというのが通例です。電話に出ると、年配の女性がいると言いました。

「社長さんかね。私はもういい年をした婆さんです。毎週末にね、病院に通っているんですよ。必ず中央タクシーさんを使わせてもらっているんです。こんなことまで社長さんに話すのはどうかと迷っ

